UNIRITA Magazine

ユニリタマガジン

1
2019

新ビジネスコラム

API時代を支えるユニリタの サーバレスアーキテクチャとは

～クラウド、基幹システム、IoT、なんでもつなげてみる～

業務課題解決ソリューション

Cloud Transitionソリューション

～デファクトスタンダードになりつつある
クラウド環境への移行・運用・監視～

製品&サービス最新トピック

「RPA運用設計サービス」のご紹介 RPA活用による成果導出に向けて

システム管理者の会

年度末まで各種セミナーを開催します
リーダーズミーティング/アップデートミーティング

UNIRITAユーザ会

UNIRITAユーザシンポジウムは
1月末までにお申し込みください
第44回西日本ITフォーラム開催のお知らせ

パートナー様ご紹介

アライズイノベーション株式会社
超高速開発ツールの共演
Wagby & Waha! Transformer

ユニリタ
イメージキャラクター
ホラン千秋

新 ビジネス コラム

API時代を支えるユニリタのサーバレスアーキテクチャとは

～クラウド、基幹システム、IoT、なんでもつなげてみる～

2020年にはAPIエコノミーがさらに拡大

APIエコノミーという言葉に耳慣れて久しいですが、IT業界では今もなお、APIはホットな話題です。

昨年から今年にかけて、米国ではAPIマネジメント企業の買収が相次ぎました。また、APIエンジニアの年収は1,000万円を超えているとも言われています。

マイクロソフト創業者のビル・ゲイツは、インフォメーションフロー（情報の流通)は企業の血液のようなものだと言っています。APIによってもたらされるインフォメーションフローは、企業の競争力を短期的に高めるだけではなく、将来、企業の大きな資産となることでしょう。

また、APIは企業内・企業間のデータをつなぎ、人工知能に必要なビッグデータを作り出します。

APIが入り口のテクノロジーであるとすれば、人工知能は出口のテクノロジーであり、この2つはデジタル変革においてコインの表裏の関係にあります。（図1参照）

図1：API・人工知能とデジタル変革

攻めのITプロジェクトにおける課題

さて、多くの企業では、売上貢献や顧客満足度の向上に直結する「攻めのITプロジェクト」に投資を行っています。

攻めのITはスピード重視のため、スクラッチで開発するよりもさまざまなサービスを組み合わせてSmall Start Quick Winを実現させようとすることが多くなっています。

そのサービス間の組み合わせにおいて、APIは大いに活躍します。

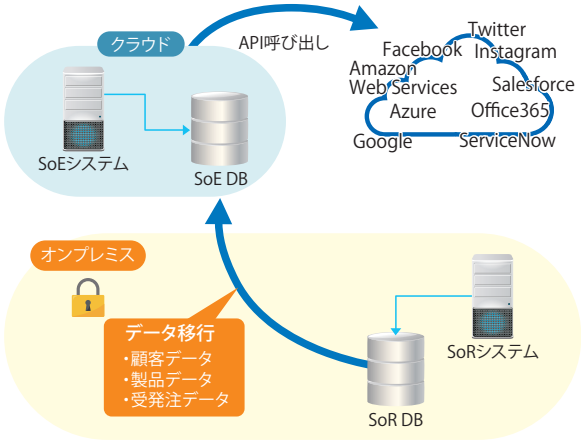
例えば、ある顧客満足度を向上させるためのサービス(これをSoE：System of Engagementと呼びます)をクラウド上に構築したいと考えたとします。

その時、FacebookやInstagramなどのAPIを連携させて活用し、サービスの充実化を図ろうとするでしょう。

しかしながら、顧客データ、製品データ、受発注データといった重要な情報はオンプレミスの基幹システム(これをSoR：System of Recordと呼びます)に存在しています。

もちろん、それらのデータをSoE側に移行し複製する方法もありますが、セキュリティ面やリアルタイム性での懸念が残ります。（図2参照）

図2：SoE側にデータを移行して複製する方法



では、SoE側からオンプレミスに存在する基幹システムのデータを、セキュアに、そしてまるでFacebookやInstagramのAPIを使うような感覚で簡単かつスピーディにアクセスするためには、どのような手段を取れば良いのでしょうか。

ポイントは2つです。

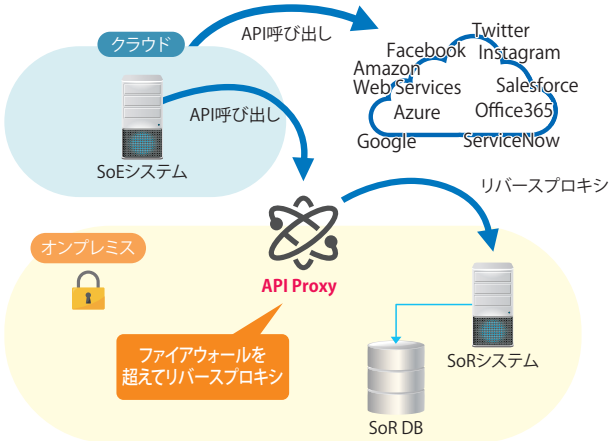
1. どのようにしてアクセスするか
2. その仕組みをどのように開発するか

SoEとSoRを連携させるために

ユニリタでは、API Proxyというサービスに対応しています。

ベースのテクノロジーはいわゆるリバースプロキシであるため、このサービスをオンプレミスのDMZ（非武装地帯）に配置し、SoEからのみのアクセスに限定すれば、アクセス自体はできるでしょう。（図3参照）

図3：リバースプロキシ経由でアクセスする方法



しかしながら、アクセスしたい基幹システムは1つとは限らず、さまざまなバックエンドシステムの存在が考えられます。そしてそれらは、それぞれAPIを持っているのか、持っていたとしてもRESTなのかSOAPなのか、利用しているデータベースはなにか、エラーが返された時のレスポンスはどうなのか、仕様はバラバラであることが考えられます。

これらにアクセスするためにAPI Proxyとそれぞれのバックエンドシステムの間に専用のアプリケーションサーバを立ててそれぞれで開発をしていたら、それだけで時間とお金がかかり、メンテナンス性にも課題が出てきます。

API Proxyは単なるリバースプロキシではなく「APIのマネジメント基盤」です。(図4参照)SoE開発者はオンプレミスのバックエンドシステムにアクセスする際、その仕様の違いを意識する必要はなく、API Proxyのことだけを考えれば良いことになります。

API Proxyでマネジメントできる項目は以下のとおりで、これは言い方を変えれば、SoE開発者が意識したくない、バックエンドシステムごとにバラバラな仕様の一覧と言えます。

❶ 認証

バックエンドシステムがどのような認証の仕組みを持っていたとしても、API Proxyとバックエンドシステムの間はすでに認証を済ませているため、SoE開発者はAPI Proxyとの統一された認証メカニズムのみを意識すれば良いことになります。
このメカニズムとしては業界標準のSAML、OpenID、OAuthなどを利用します。

❷ 認可(アクセス制御)

バックエンドシステムに対するアクセスのコントロールはすでにAPI Proxyに設定済みのため、SoE開発者は特にACLを気にする必要はありません。

❸ 負荷分散、キューイング

SoE側がコンシューマ向けであれば、バックエンドシステムの負荷も気になるところです。
API Proxyではバックエンドシステムに対して1秒間にアクセスできるリクエスト数などを設定でき、それを超えた場合はキューイングしたり、利用者に特定のメッセージを伝えたりできます。

❹ キャッシュ

よくアクセスされるデータはAPI Proxyの中でキャッシュしており、バックエンドシステムに都度問い合わせをする必要はなく、すぐにSoE側に応答できます。

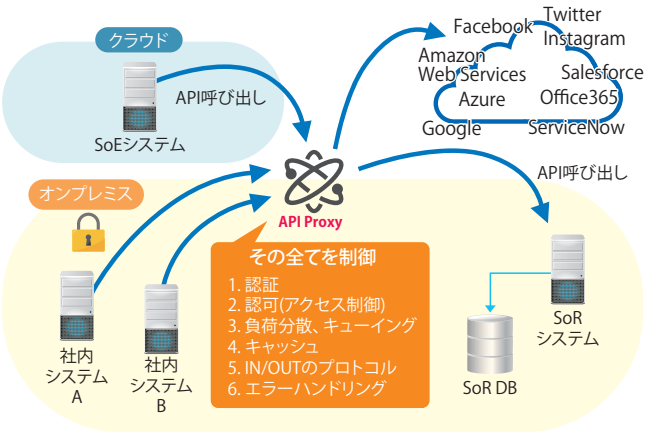
❺ IN/OUTのプロトコル

バックエンドシステムがRESTなのかSOAPなのか、APIを持っておらずJDBCのみでのアクセスなのか、などに関わらず、SoE開発者からすればRESTを呼べばJSONで返される、ということのみを意識すれば良いことになります。

❻ エラーハンドリング

バックエンドシステムでどのようなエラーが発生したとしても、API Proxyはそれらに応じて統一されたレスポンスコードや画面を返します。

図4:APIのマネジメント基盤



サーバレスアーキテクチャ

サーバレスアーキテクチャという言葉を聞くと、AWS Lambdaなどを真っ先に思い浮かべる方が多いかもしれません。それらとユニリタのサーバレスアーキテクチャの違いは、SoE/SoRのハイブリッド、つまりクラウドとオンプレミスのハイブリッドにあると言えます。

今、Web系システムの重要性は、サーバ開発からフロントエンド開発に移行してきています。

さまざまなAPIやマイクロサービスが提供され、要件の大半を充足できるようになってくると、開発者はスクラッチで開発するより「組み合わせ」によるスピードを重視し、提供したいサービスに対する本質的な設計や、UI/UXのデザインに多くの時間をかけられるようになります。

サーバの事前プロビジョニングや運用コストが必要ないことも大きなメリットです。

API Proxyもサーバレスアーキテクチャを前提として提供されています。つまりSoE開発者は、バックエンドシステムのために何かしらのサーバをプロビジョニングしたりアプリケーション開発をしたりすることは一切せず、必要な時に必要なだけフロントエンドからAPI Proxyに対してRESTを呼び出し、データを取得すれば良いのです。

SoE開発者がバックエンドシステムごとのセキュリティや仕様の違いに頭を悩ませていた多くの時間は、既述したように、設計やUI/UXのデザインにかけていくことになるでしょう。

おわりに

API Proxyというサービスについて、API、サーバレスアーキテクチャ、SoE/SoRという切り口から説明させていただきました。システム運用やデータ活用の分野で長らくご支援させていただいてきたユニリタは、

① 売上貢献や顧客満足度の向上に直結する「攻めのITプロジェクト」を推進したいと考えていらっしゃるお客様
② そして、雇用環境の多様化により働き方改革の一環としての「ワークプレイス変革」をどう推進すべきかお悩みのお客様

に対しても、クラウドとオンプレミスのハイブリッドというテクノロジーを持って支援できますので、お気軽に相談ください。

担当者紹介

ビジネスイノベーション事業本部
ビジネスフォース部
部長
真木 卓爾

業務課題解決
ソリューション

Cloud Transitionソリューション

～デファクトスタンダードになりつつあるクラウド環境への移行・運用・監視～

ITコストの最適化やIT資産に対する維持・運用・管理業務の負荷低減といった課題が叫ばれるいま、企業のIT戦略として、高い柔軟性、拡張性と優れた経済性からPaaS（Platform as a Service）、HaaS/IaaS(Hardware /Infrastructure as a Service)といったクラウド環境をITインフラに採用することがデファクトスタンダードとなりつつあります。AWSやAzureといったビッグネームをはじめ、メーカー系や、専門的なサービスに特化したものなど、さまざまなクラウドサービスが乱立しており、利用者は複数の選択肢の中から、自社にとって最適なクラウドサービスを選定する必要があります。しかし、信頼性や拡張性といった世間でよく聞くクラウド環境選定のポイント（図1参照）にばかり目を向けてしまうと、「移行・利用・運用・監視」といった企業ITのインフラ運用に必要不可欠なポイント（図2参照）への対応の不備が後から露呈し、クラウドへの移行が限定的になってしまっているケースが多く見受けられます。

このような問題に対して、ユニリタでは長年培ったシステム運用のノウハウをもとに「お客様が選定されたクラウド環境」に最適な運用・監視環境の構築と共に移行の実施までを行う「Cloud Transition（クラウド トランジション）ソリューション」を紹介します。

図1: クラウド基盤選定のポイント

	AWS	Azure	メーカー系	データセンタ系
信頼性	◎	◎	◎	◎
拡張・柔軟性	◎	◎	◎	◎
可用性	◎	◎	◎	◎
セキュリティ	◎	◎	◎	◎
PCIDSS クレジットカード業界のセキュリティ基準	3.2	3.2	○	オプション
コスト	◎	○	×	△

図2：移行・システム運用に対する選定のポイント

	AWS	Azure	メーカー系	データセンタ系
標準アプリケーション(API)の充実度	◎	◎	×	×
移行サービス	×	△	オプション	オプション
サポート、サービスデスク	×	○	○	○
マネージド（監視）サービス	○	×	オプション	オプション
BPO（運用代行）	×	×	オプション	オプション

企業ITをクラウドへ移行する際に考慮するべきポイントとは（フルクラウドといってもすべてを移行できるわけではない）

企業ITをクラウドへ移行する際、選定するPaaS、IaaS自体の比較もさることながら、移行作業時や移行後のシステム運用に必要となる業務に対する対応を十分に考慮する必要があります。以下のポイントを押さえたうえで導入するクラウド基盤を選定すると比較的スムーズな移行が期待できます。

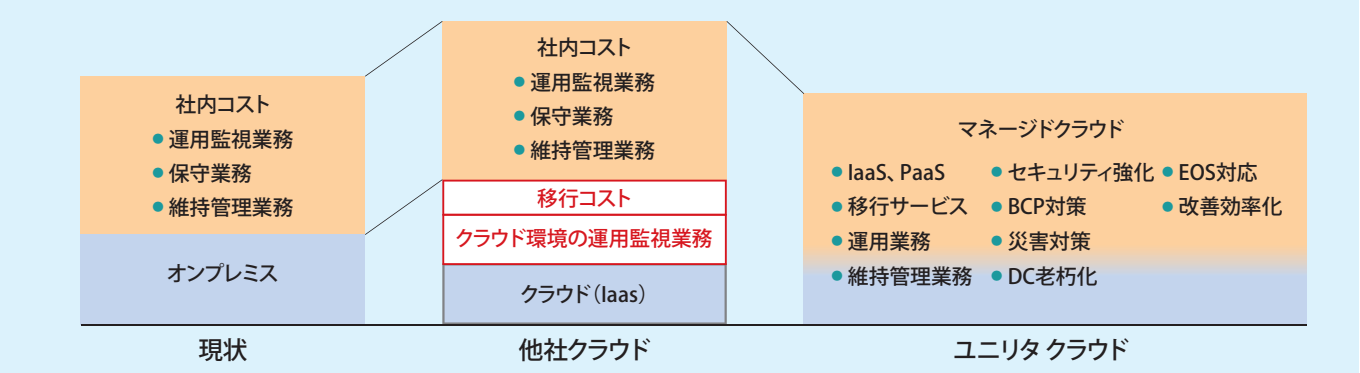
- クラウド環境においても、無くてはならないのは「運用・監視」であること
- 障害発生時のRTOがオンプレミスと遜色ないこと
- 可用性に関しては、スペックと期待する機能に乖離が発生する可能性があるのでよく検証すること
- オンプレミス→ハイブリッド→フルクラウドといったクラウド環境の変化にも運用・監視・保守が柔軟に対応できること
- 拡張性と柔軟性を求めた際、コストが上昇しないこと
- PaaS、IaaSの「標準アプリケーション、API」を熟知し、効率よく利用することで無駄な構築・開発を防止すること
- 環境設計～ネットワークを含む周辺環境～プロビジョニング～移行～運用設計～マネージドサービスまでをシームレスに検討・実施できる能力の高い要員が必要となること

このような条件をクリアしお客様の求めるシステムをクラウドに移行するために、多くのクラウドベンダーではオプションメニュー、プライベートクラウドによるリソース、セキュリティの独立性担保などで実現していますが、これらは非常に多くのコストが発生します。

実際にクラウドへの移行を実施した企業の中では、思ったよりコストや社員への負担が軽減しなかったという声をお聞きすることがあります。この原因としては、移行にかかる作業負担を想定していなかったり、クラウド環境へのセキュリティ強化対策や、ユーザビリティの違いから起こる社内からの改善要望など、運用開始後に発生する想定外の作業に多くのリソースやコストがかかったことなどがあげられます。

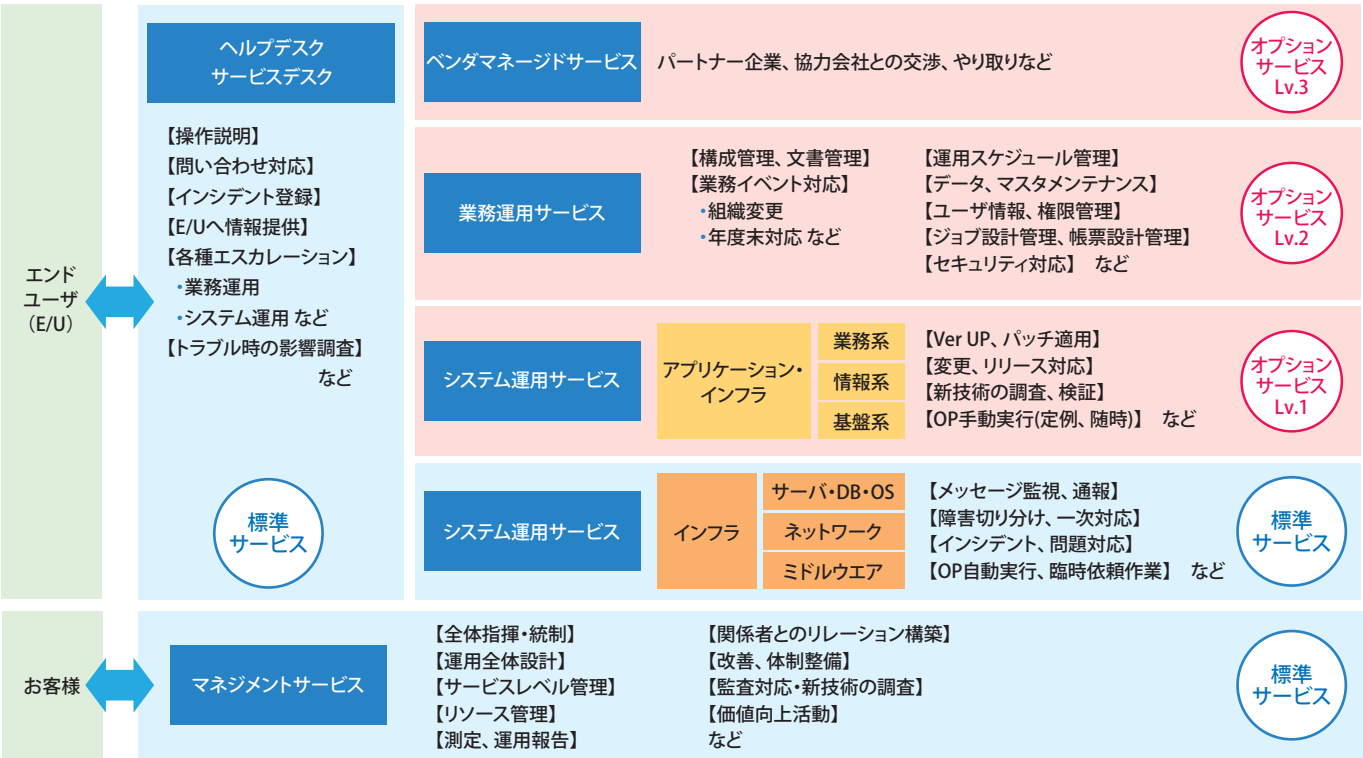
「Cloud Transitionソリューション」では、ユニリタがこれまで培ってきた業務運用に関するノウハウやメソドロジーを用い、お客様にあったクラウド移行から運用体制までの提案を通じ、コストとリソースの削減を実現します。

お客様は削減で得られたリソースを、データを活用した戦略的IT投資や、ビジネスに直結する新システムの構築など、競争力の強化や売上向上に直接貢献する「攻めのIT」に費やすことが可能となります。



クラウド移行・運用・監視サービスメニュー

運用を知り尽くしたユニリタが提供する、満足度の高いフルマネージドのクラウドサービスです。



ユニリタだからできるシームレスなクラウド移行サービス「Cloud Transitionソリューション」

- 利用するPaaS、IaaSなどはお客様による指定も可（特に指定がない場合は当社推奨環境を利用します）
- 利用にあたって、キャパシティプランニング～申し込み～ネットワーク環境設定・ルータ設定、移行・運用・監視環境までオールインワンで提供
- 必要なサービスレベルを１ヵ月単位で選択可

ユニリタの「Cloud Transition ソリューション」はこれからクラウド環境への移行を検討しているお客様には、事前の調査から移行、運用・監視までフルマネージドで支援します。また、すでにクラウドを使用中で、現在の環境に課題を抱えているお客様には、現在使用しているクラウド環境を変更することなく、課題解決に必要なサービスを選んで利用いただけます。

クラウド移行について、何か課題やお悩みがございましたら、ユニリタまで何なりと相談ください。

担当者紹介

取締役　常務執行役員
ソリューション事業本部長
秋山　泰

製品＆サービス紹介
最新トピック

「RPA運用設計サービス」のご紹介 RPA活用による成果導出に向けて

担当者紹介

株式会社ビーエスピーソリューションズ
代表取締役社長
藤原達哉

RPA活用において顕在化している問題・課題

相変わらず、RPAについてのニュースは多くのメディアで取り上げられています。RPAによって成果が出ているという報道もありますが、利用が拡大するにつれ、問題や課題も顕在化し、話題になっています。

例えば、「内部統制への対応が後手に回った」、「RPAにかかるリスク対策の不備」、「手段（RPA）が目的化してしまい、思ったほど成果が出ていない」、「RPAツール活用のためにこれまでのシステム構築と同じように、業務分析とRPA化によるコスト削減のアプローチをした結果、開発や保守に多くの工数を要し、トータルで見るとコスト高になってしまった」、「RPAツールによって操作しているシステムの画面が変更され、RPAツールが動作しなくなってしまった」、「ルールやガイドラインの不備で、本来RPAツールでは操作するべきではない処理が行われた（承認行為、出退勤、機密情報への不許可アクセスなど…）」などです。

RPAを有効に活用し、成果を導出するためには

RPAツールはあくまでも「道具」であり、「働き方改革」のための労働時間の削減や、ピーク性のある業務の納期短縮、単純業務(作業)の生産性向上といった、成果目標を定めた上で推進することが重要であると考えています。

RPAによる成果導出のために、ビーエスピーソリューションズ（以下BSPソリューションズ）では以下のアプローチをおすすめしています。

RPAの特性を理解する	RPAの位置づけを理解する、 PoCによってツールを選定する
RPA適用の前提を理解する	プロセスによる可視化、基準とルール 内部統制など社内ルールへの対応
成果目標を定める	RPAによって何を実現するのか 成果を定義する
適用方針を定める	業務プロセスのどこに適用するのか 仕事と作業を分け、依存しすぎない
運用設計の実施、組織を設置する	管理プロセスと機能・組織を設計する PDCAサイクルによる運営を行う

組織・機能の設置と、プロセスの設計（コンサルティングサービス）

RPAツールを全社的に活用するためには、「運用」と「サービスマネジメント」が不可欠です。業務プロセスは生き物であり、日々の運用が欠かせません。RPAツール（ロボット）は、「業務プロセスを人に代わって実行するサービス」ととらえることができます。したがって、運用にはITILフレームワークによるITサービスマネジメントの実装が有効なのです。

BSPソリューションズはITILフレームワークを活用したコンサルティングの提供を通じ、このノウハウがRPA運用において有効なことを確認していおり、以下のような活動をご支援します。

- 機能・組織の設置（ステークホルダーの確認）
- ドキュメント体系の策定と整備
- 教育・トレーニング、定着化のための啓蒙活動
- 運営のためのツール群の整備
- 継続的な改善のための運営組織の活動支援

運用設計の実際（ドキュメント作成支援）

RPAの活用においては、そのツールの特性上、IT部門だけではなく、事業部門や管理部門との調整や合意形成が必要不可欠です。

IT部門は、これまでは自らの管理下であるシステムを利用していただく形でしたが、RPAツール（ロボット）という人の作業を代行するサービスを提供しているため、場合によってはIT部門側で制御ができない場合も想定されます。

部門間の合意形成のためには、共通の文書の整備や、教育・トレーニング、ディスカッションを行う必要があります。

RPAにおける運用設計を実施するにあたり、BSPソリューションズではドキュメント体系を整備し、当社のサンプルを利用しながら進めることでリードタイムを短縮することをご提案しています。

作成するドキュメントの例を以下の表に示します。

まとめ

RPAツールを活用し、成果を導出するためには、運用設計が重要になります。BSPソリューションズでは、長年にわたる運用設計や、ITサービスマネジメントのノウハウを活かしたコンサルティングサービスを提供しています。

RPAツールの活用に向けたPoC（Proof of Concept）から、活用に向けた成果設計、ガイドラインやルールの策定、管理プロセスの設計、教育・トレーニング方針の策定、成果導出のための定着化活動や継続的改善活動を支援しています。

PRA活用の詳細は、お気軽にお問い合わせください。

作成するドキュメントの例

項	分類	文書名	テンプレートご提供	ご提案範囲	備考
1-1	初期導入	RPA適用方針、ポリシー　RPA適用ルール（導入時に守るべきルール）	○	○	A4 5P程度
1-2		RPA適用ガイドライン	○	○	A4 5P程度
2-1	詳細設計	適用診断プロセス　ガイドライン	○	○	A4 15P程度
2-2		開発プロセス　ガイドライン	○	○	A4 15P程度
2-3		運用保守プロセス　ガイドライン	○	○	A4 15P程度
3-1	教育・トレーニング	初期説明資料（RPAとは）	○	※	導入時の合意形成に利用 PPT 20P程度
3-2		ツール教育資料	N/A	×	ツールベンダ各社の提供を想定
4-1	組織体制設計	RPA運用体制　方針書	○	○	A4 or PPT 5P程度
4-2		サービスデスク　設計書	○	○	A4 or PPT 10P 程度
5-1	サービス内容	サービスカタログ	○	○	利用者とRPA提供者と合意形成　運営体制の構築と連携
5-2		ステークホルダマップ	△	○	関係者の役割と責任範囲を明確化
6-1	管理ツール設計	インシデント、変更管理など	個別	※	ITSMプロセス管理、ナレッジ蓄積、活用
7-1	RPAツール運用管理	ベンダ管理規程　ツール運用管理規程（監視、Backup、保守）	個別	※	RPAツールそのものの運用設計および管理
8-1	RPA適用文書	適用診断アンケート	△	□	利用者アンケート/適用診断ガイドラインと連動
8-2		アンケート集計分析シート	△	□	適用診断プロセスガイドラインと連動　EXCEL
8-3		業務仕様書（現状）	△	□	保守・継続利用に向けた標準化
8-4		業務仕様書（RPA適用）	△	□	開発プロセスガイドラインと連動
9-1	RPA管理台帳	ロボット管理台帳	△	□	管理ツールによる代替可能
9-2		変更管理台帳	△	□	管理ツールによる代替可能
9-3		インシデント台帳	△	□	管理ツールによる代替可能
9-4		申請書類	個別		
10-1	全体管理	貴社IT運用との整合性の検証	個別	※	システム変更におけるRPAの影響、など
10-2		RPAにかかるドキュメント体系	個別	※	ドキュメント体系一覧

○：テンプレート目次、記載内容例：貴社と協議の上作成　△／□：目次により貴社と協議の上作成　※：別途ご相談：オプション

システム管理者の会

年度末まで各種セミナーを開催します
リーダーズミーティング/アップデートミーティング

SysAdmin's Group

企業内のITを支えるIT部門は、コスト削減や効率化だけではなく、ITを使ってビジネスの可能性を広げる役割を担うようになりました。そこで働くエンジニアには、システムの安定稼働を守るだけではなく、常に新しい技術を学び続け、プロのエンジニアとして企業のビジネスをけん引していくことが求められています。

システム管理者の会では、この姿勢を「エンジニア魂」と呼び、エンジニア魂を持つエンジニアの皆さまを応援していくことを指針として掲げています。

応援の活動方針を「スキルアップや知識の習得を支援」「情報交換・交流の機会を提供」「若い人材の育成とキャリアの創出」としているなかで、今回のUNIRITAマガジンでは、半期に一度開催している『リーダーズミーティング』と『アップデートミーティング』を紹介します。

リーダーズミーティングとは?

リーダーズミーティングは、組織メンバの教育を先導するリーダ層向けに、メンバ育成に対する課題解決への情報共有や議論を行ったり、自らも継続して学習する機会を得たりすることを目的としたセミナーです。毎回30人ほどの方々にお集まりいただき、活発な意見交換が行われています。

アップデートミーティングとは?

システム管理者認定講座の合格者が集い語り合う場として、年に2回開催しています。

参加者同士がITサービス運用の最新情報を学ぶとともに、認定講座で得た知識や経験の活かし方を活発に意見交換します。皆さまも「システム管理者認定講座」を受講し、試験に合格して参加しましょう。

過去の開催実績

	タイトル	講演者
第13回	「変化に強い」エンジニアの育成	黒田 光洋 様(パナソニックITS株式会社 日経BP社より『『ひとり情シス』虎の巻』を刊行)
第12回	「ITIL」で理解したいITサービスと事業貢献	沢渡 あまね 様(あまねキャリア工房 代表 業務改善・オフィスコミュニケーション改善士・IT運用エバンジェリスト)
第11回	実践したいクラウド時代のITサービス管理	小関 陽介 様 (日本ビジネスシステムズ株式会社 / ITIL Expert)
第11回	AIを活用したシステム管理の自動化設計	ブレインズコンサルティング株式会社 様
第10回	システム管理者のためのRPA入門	大石 純司 様(RPAテクノロジーズ株式会社 最高技術責任者、RPAエンジニアリング株式会社 代表取締役社長)
第9回	企業の情報セキュリティとCSIRT	柄 登志彦 様(大成建設株式会社 社長室情報企画部長・大成情報システム代表取締役社長)

おつカレー様です。
リーダーズミーティングは、初参加の方を歓迎しています。会場でお会いできることを楽しみにしています。

次回開催

このたび、第14回リーダーズミーティングの開催が2019年2月20日に決定しました!

TCO削減やセキュリティ強化、コンプライアンス強化などが求められる昨今で、重要性を増してきた「IT資産管理」をテーマに、国際IT資産管理者協会 日本支部長の武内 烈様をお招きして、マルチクラウド環境における資産管理とベンダー管理の重要性を説明するセミナーを開催します。第12回アップデートミーティングは3月中旬で計画中です。続報は「システム管理者の会 ポータルサイト」で発表していきますので、お見逃しなく。

第14回リーダーズミーティング
2019年2月20日(水)
武内 烈 様
(国際IT資産管理者協会「IAITAM」日本支部長
ITIL Expert、IAITAM 認定講師)

見る知る学ぶ? → 参加する!

https://www.sysadmingroup.jp/seminar/p16713/

UNIRITA ユーザ会

UNIRITAユーザシンポジウムは1月末までにお申し込みください

UNIRITA Users' Group

ユーザ会活動の集大成をお披露目する場である、UNIRITAユーザシンポジウムの開催が近づいてきました。昨年 12 月に各地区にて開催された冬の全体会では、各研究グループより成果発表に向けた意気込みなどを熱く語っていただき、ラストスパートに向けて熱が入ってきました。研究グループメンバは発表を通じて、1 年間の研究成果と自身の成長を実感する場となります。また、上司の方は部下の成長をその場で確認できる貴重な機会となります。

研究発表以外にも、日常では体験できない刺激的なセッションを設けております。この機会に、ぜひご参加ください。

なお、1 月 31 日までは「アーリーバード割引価格」でご案内していますので、1 月中のお申し込みがおすすめです。

福岡で皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

ユーザ会ホームページにてお申し込み受付中!

http://36symposium.uniritauser.jp/

第44回西日本ITフォーラム開催のお知らせ

2019年1月18日(金)に、第44回西日本ITフォーラムを開催します。今回は、2つの旬なテーマを用意しました。

人手不足もあり、『働き方改革 』『業務効率化』『DX(デジタル・トランスフォーメーション) 』への対応など、各企業での取り組みが本格化するなか、人材のスキル変革やRPAの問題点などが、推進の阻害要因として見受けられるようになりました。

第1部では、事業変革が行われる時代の中でIT人材に対する育成の方向性はどうあるべきかをテーマとし、そのためのコンピテンシースキルの可視化について説明します。

第2部では、多くの企業で進められているRPAの取り組みが、目的に対して効果がうまく発揮できていない理由や、今後発生する課題について、実際の事例を交えて説明します。

講演後には、参加者同士のディスカッションや、情報交換の時間として懇親会も予定していますので、あわせてご参加ください。

詳細はユーザ会ホームページへ

http://www.uniritauser.jp/event/west.html

Arise Innovation, Inc.

パートナー様ご紹介

超高速開発ツールの共演
Wagby & Waha! Transformer

ノンプログラミングで素早くアプリケーションを構築!システム開発の工数を大幅削減!

日本は少子高齢化により労働人口が減少し、今後企業にとって熟練技術者を中心とした労働力が不足していきます。アライズイノベーション株式会社は、人工知能(AI)技術を活用した「企業向けAIサービス(Enterprise AI)」、システム開発において高い生産性を実現する「超高速開発(xRAD)」、ホワイトカラー業務を効率化・自動化する「RPA(Robotic Process Automation)」、そしてそれらのサービスの基盤となる「クラウド」を柱としたITソリューションで、お客様の新事業の立ち上げ(Arise)と既存事業の変革(Innovation)を実現いたします。

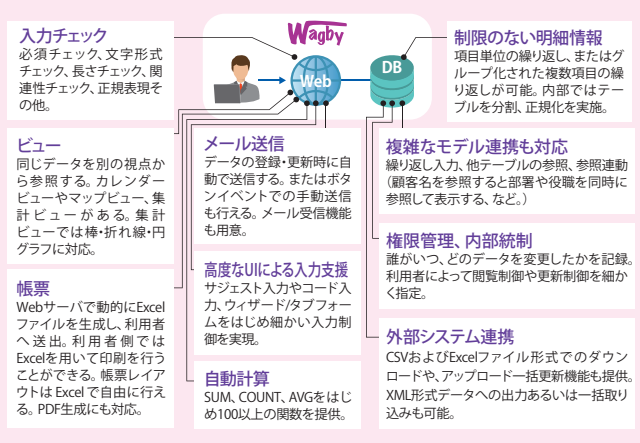
アライズイノベーションで取り扱っているJavaアプリケーションの自動生成ツール「Wagby(ワグビィ)」は、沖縄県に本社を置く株式会社ジャスミンソフトが開発する超高速開発ツールです。国内360社以上で使われており、Webベースのエンタープライズアプリケーションをノンプログラミングで超高速に開発することができます。「Wagby」の設計情報から業務ルール、画面、データベーススキーマなど、すべてを自動生成します。システム開発の詳細設計から単体テストまでの工数を大幅に削減し、またアジャイル開発に重要な実装とレビューを素早く行うことが可能です。

- ポイント1 ノンプログラミングで素早くWebシステムを開発することが可能
- ポイント2 OSSを中心とした基盤を採用し優れたポータビリティを実現
- ポイント3 生成されたJavaソースコードのカスタマイズが可能であり拡張性を担保

ノンプログラミングでアプリケーションを素早く開発

業務アプリケーションで求められる機能を標準装備

「Wagby」は業務アプリケーションで必要となる、多くの標準的な機能をノンプログラミングで実現します。



ブラウザで開発、実行

Webブラウザで設計情報を入力後、ビルドによってソースコードを自動生成し、アプリケーションが完成します。

設計
Webブラウザ上で設計情報を入力。データ定義、関連、計算式、入力チェックなど、すべての要件を備えています。

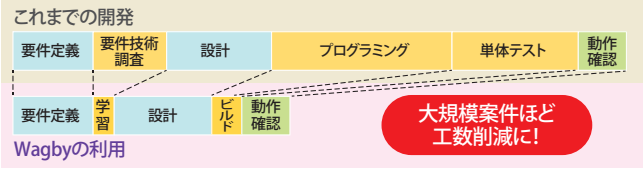
自動生成
ビルドによってJavaコードを完全自動生成。このコードはカスタマイズが可能なようにデザインされています。

実行
Webベースの本格的な画面と機能を実現します。ワークフロー、全文検索、地図連携など、多くのニーズを満たします。

圧倒的な開発生産性と保守性の向上

「Wagby」のソースコードの自動生成率 は90% 以上を達成しており、場合によっては数百%という圧倒的な開発生産性の向上を実現します。

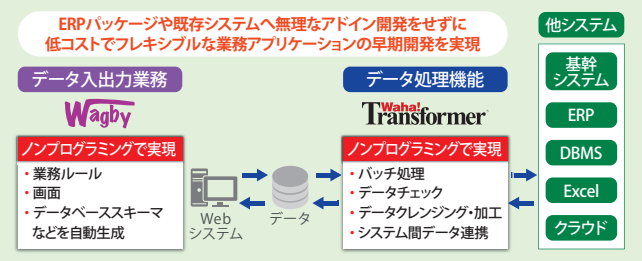
さらに運用後の改善要求にも対応しやすいというメリットがあります。



ユニリタの「Waha! Transformer」との連携

「Wagby」と「Waha! Transformer」を組み合わせて活用することで、さらなるシステム開発の効率化が期待できます。「Wagby」ではWebのオンラインシステムを素早く開発できます。一方で、「Wagby」が不得手なバッチ処理は「Waha! Transformer」で開発することで、エンタープライズシステムに必要な機能を一貫して開発することができます。

また、他システムとのデータ連携にも「Waha! Transformer」を活用することで、既存システムとの連携やデータ移行にも素早く対応することが可能です。



お問い合わせ先 アライズイノベーション株式会社
TEL:03-5534-9967 Mail:info@ariseinnovation.co.jp

Wagby 検索

UNIRITA

株式会社ユニリタ www.unirita.co.jp

本社 〒108-6029 東京都港区港南2-15-1 品川インターシティA棟 TEL 03-5463-6383
名古屋事業所 〒451-0045 名古屋市西区名駅3-9-37 合人社名駅3ビル(旧48KTビル) TEL 052-561-6808

ユニリタグループ
株式会社アスペックス / 株式会社ビーティス / 株式会社データ総研
備実必(上海)軟件科技有限公司 / 株式会社ビーエスピーソリューションズ
株式会社ユニ・トランド / 株式会社ユニリタプラス/株式会社無限

※ 本誌掲載の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。
※ 掲載されている内容については、改善などのため予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。

©UNIRITA Inc. 2019.1 MG-1901-1700-1